

●公開対談シリーズ 第2回●

# NINAGAWA 千の目

まなさし



**野村萬斎**

野村萬斎（のむらまんざい）

1966年生。野村万作の長男。祖父故6世野村万蔵及び父に師事。重要無形文化財総合指定者。3歳で初舞台。東京芸術大学音楽学部卒業。「狂言ござる乃座」主宰。国内外での狂言公演に参加する一方、現代劇や映画「陰陽師」に主演、NHK「日本語であそぼ」に出演するなど幅広く活躍。94年に文化芸術家在外研修制度により渡英、芸術祭新人賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、紀伊國屋演劇賞、朝日舞台芸術賞等を受賞。著書に「萬斎でござる」、「狂言サイボーグ」、「狂言三人三脚・野村萬斎の巻」等がある。世田谷パブリックシアター芸術監督。

Mansai Nomura × Yukio Ninagawa

公開対談シリーズ「NINAGAWA 千の目」の第2回目のゲストは、狂言師であり、世田谷パブリックシアター芸術監督でもある野村萬斎さん。「オイディップス王」など蜷川作品に出演したこともあるだけに、二人の話は演出論から世界の中の日本演劇まで多岐にわたり、尽きることがなかった。

# 蜷川幸雄

(財)埼玉県芸術文化振興財団芸術監督・演出家

photo:幸田森

蜷川幸雄（にがわゆきお）

埼玉県川口市出身。シェイクスピアはもとより、ギリシャ悲劇から日本の古典・現代劇まで幅広く手がけ、数々の名舞台を世界に送り出している。昨年も「近代能楽集」ニューヨーク公演、歌舞伎「NINAGAWA十二夜」、「王女メディア」、「天保十二年のシェイクスピア」など多数の演出を手がける。まさに世界を舞台に疾走し続ける演出家。2006年、第5回朝日舞台芸術賞特別大賞、第13回読売演劇大賞・大賞、最優秀演出家賞受賞。(財)埼玉県芸術文化振興財団芸術監督。

## 苦痛もまた快樂であるかのように 演じているのが僕にとっては新しい発見

蜷川（以下N） 「NINAGAWA千の目」シリーズ、第2回目のゲストは狂言師の野村萬斎さんです。萬斎さんは優れた狂言師であるとともに、僕のライバルでもあります。萬斎さんは世田谷パブリックシアターの芸術監督、そして時には俳優であるという多彩な活動を行っています。今日は親しい友人としていろいろな事をお聞きしたいと思っています。では、萬斎さんです。（拍手）

萬斎さんは、アテネのヘロデス・アティコスという古代劇場でギリシャ悲劇『オイディップス王』という芝居を2年前にやりました。その時のビデオがあるのでちょっと観ましょか。

(映写開始)

アクロポリスの麓にあるので、パルテノン神殿が劇場の上の方に見えています。変な緊張感がよみがえりますね。後で観ると自分で、ああしたらよかったとか、あそこがいいなあと感慨はあるものですか。

野村（以下M） ありますよ。なんかはずかしい気もします。これ以降は、観客席と舞台という関係性を非常によく考えるようになりました。この劇場は、6000から7000人入れまして、この客席の勾配が急なのでしかかってくるようで、ある種ここに立たされると本当に生け贋になるというか、衆人環視に喘いでいるというか、周りから全ての観客に取り囲まれ、追い詰められた獣的な一種の切迫感というのを感じました。

N どうですか、日本の古典芸能はある様式の中、あるいは衣装とか、面とかの中にそれぞれの個性を封じ込めるというか、覆い隠してしまう。その一種のねじれる現象の中で自分自身を表していくなければいけないという所はあるですよ。

M そうですね。いくら血を流そうと、血を浴びているということはまずはありません。だからどこか心の中で、血を流してみたいという気持ちもあります。

N 初演はこのセットが鏡で出来ていて、萬斎さんが血糊で塗られて出てきた時、この鏡にその血をビシャーと体ごと擦り付けるようこすり付けて、それは本当に泥んこ遊びをしているようにすごく嬉々として、目を失ったことも、苦痛もまた快樂であるかのように演じているのが僕にとっては新しい発見で、ちょっと衝撃的な表現だったのです。

閉じ込められた表現の中で生きてきた人が、閉じ込められた殻を取られたらこんなに生きしく人間に表現するのだということは、すごく面白くて新しい発見だったので、また萬斎さんと仕事をしようと思う一つの原因でもありました。

その他にリアルな表現を求めるとして萬斎さんは大変だったと思いますが、日本の古典芸能である狂言も出発は野外でやっていたのですよね。そこで立ち合いがあったり、他流派との競演があったり、かなりすさまじい芸能のあらわなものだったという気がします。そういう最初の光景などを思い浮かべて、荒んだというか、雨風の中でなおかつ生き抜こうとするような、初期の芸能の持っていたいろいろな力は脈々と流れている血の存在にあるのかという気がしますが、萬斎さんの中でそういうことは自覺的にあるものなのですか。

M 小さい頃から型にはめ込まれるのが我々の稽古方法なのですが、なぜこの型が出来たのかというような根本を知りたいという欲求



はあります。

そうでないとその型を信用しきれないです。やはりこういうプリティプの中で何かがあり、だからそれを洗練していくとこういう型になったという、結論だけを信じるというよりも、その型が生まれる前のものを突き詰めた中で型がある。だからその根本を知ることで型が生きるのではないかという発想もあるので、逆にいうとリアルに血を流すであるとか、雨に濡れるとか、という事の方が沸き立ってくるということはあります。

## 狂言の持つ制約を 逆に想像力のバネにする

N 萬斎さんが演出・出演なさった『間違いの喜劇』は、シェイクスピアの狂言化というか、あれは狂言でいいんだよね。

M そうですね。狂言様式でやるシェイクスピアまでいきたいなと思っています。

N その狂言化された芝居をロンドンのグローブ座でも上演されたのですが、そういう挑戦をなさるのは、僕が想像するに、それまでの伝統的なものを踏まえながらなおかつ自由に羽ばたきたいという思いがあるのだろうか。新しい型の創造とか、新しい創造とかを萬斎さんが考へていて、そういうシェイクスピアを上演するのかと想像しますが、どうですか。

M そういう新作に向かう時に、先ほど言っていた元々の狂言の精神はなんなのかと考えるので。どちらかというと今は型をきっちりやる芸が評価される部分もちろんありますが、本来はドラマとして、または特に狂言の場合はシチュエーションを見せるという事が一つの命題という気もしました。

ひたすら狂言の元々持っているあり方、シチュエーションを人間の生き様として列挙していくかもしれません、そこで見せるのはイギリスの演劇と違う所だぞというアイデンティティとして見せていくたいと思っています。